冨田幹夫*： 富山に自生する新種エッチュウミセバヤ

Mikio TOMIDA*: A new *Sedum* from Pref. Toyama

(Plate III)

ミセバヤ (*Sedum sieboldi* Sweet) は観賞用として広く栽培されているが，現在確かな自生地として認められているのは，小豆島の寒霞渓のみである。かって北海道，あるいは本州北部に産すると言われていたのは，それぞれ今日のヒダカミセバヤ *S. cauticolum* Praeger, ツガルミセバヤ *S. tsugaruense* Hara と混同していたためと考えられる。北陸からはミセバヤの一種として，カガノベンケイソウ *S. kagamontanum* Maxim. が，飯沼慾斎の「草木図説」(1856) にある加賀産ベンケイソウの図をもとにして報告されているが，慾斎以後，誰も生品あるいはその自生地を確認していない。筆者は加賀に隣接する越中富山で，かって自生地に近い山村に住んでおられた岡本律恵氏より，ミセバヤらしい植物が谷川に自生することを教えていただき，1967 年 10 月 15 日に，本植物の自生を確認できた。土地の人はこの植物を爪で切って土に挿しておけば根づくことからツメキリと呼んでいるそうで，岡本氏自身は昭和の初年頃から知っていたそうである。ミセバヤに極く近縁の種類と思われたが，採集した植物を栽培していて，その性状から文献にあるカガノベンケイソウにより近いことに気付いた。カガノベンケイソウの学名は Maximowicz が「草木図説」の図から 1883 年に記載したものでそのタイプ標本もなく不明な点が多い。そこで 1972 年 10 月 14 日，東京大学理学部付属植物園の榎本克彦氏とともに現地の再調査をした。

自生地は神通川の一支流の川岸の岩壁。確認できた群生地は三ケ所で上流から下流まで 3 km。いずれの群生地も集塊岩よりなる垂直または逆傾斜の岩壁で排水が良好であり，他の高等植物がほとんど生育しないような乾燥地であった。流水の豊富なダイモンジソウやスゲ類の群生している岩壁には発見されなかった。

次に本植物の特徴をあげる。後述するように既知のミセバヤ類とは明らかに異なるため，今後本植物をエッチュウミセバヤと称する。

1) 茎の先端のみならず，先端付近の葉腋からもしばしば花序を出す。乾燥した岩壁に自生するものは茎の長さ 10〜15 cm で，花序は先端に一つつけるだけであるが，時に水湿に恵まれた自生品は 20〜30 cm となり，花序を腋出する。鉢植え，または露地植えすれば，茎は 20〜45 cm となり，確実に多数の花序をつける。

* 東京都豊島区[redacted]Toshima-ku, Tokyo.

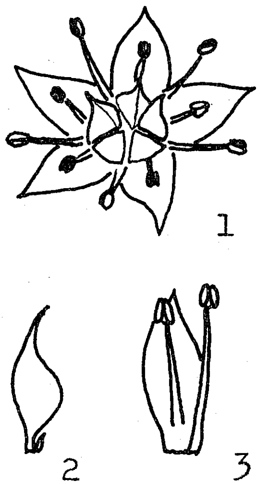


Fig. 1. *Sedum ettyuense*. 1. Flower ×5. 2. Carpel with a squama ×7. 3. Petal with stamens ×5.

2） 葉の形は卵円形，またはひし形で幅より長さの方がややまさる。卵円形のものは全縁，ひし形のものは極く浅い鋸歯と紅色の縁どりがある。葉幅/長の平均は 0.85。

3） 葉序は対生が多く，時に 3 輪生，まれに 4 輪生。3 輪生する茎は上部まで 3 輪生する。

4） 花色は淡紅色。花期は 10 月中旬。

以上の点に注目して，他の近縁のセダムと比較してみよう。ミセバヤは栽培種の変異のみならず自生地の寒霞渓でも変異の調査をした。その結果，茎の先端が何らかの原因で損傷されない限り，花序を側出しない事を確認できた。30 cm を越える大株でも先端の一つの花序が大きくなるだけである。また葉形は扇形ないし倒三角形で，通常長さより幅の方がまさる。（茎の上部，あるいは幼苗では長さの方がまさる事が多い）。さらに対生の葉をつける茎もあるが，3 輪生が圧倒的に多いという相違点がみいだされる。花の色，花の構造，花期，茎が懸垂するという点は，両者に大きな差異はない。

ツガルミセバヤは葉の形が楕円形ないし卵形，対生または互生し，下方のものはときに 3 輪生するということで，村松七郎著「秋田県植物誌」(1932 年) ではカガノベンケイソウと混同されていたようであるが，花色が帯緑白色であるのが特徴で，他のミセバヤ類と区別できる。

次にカガノベンケイソウとの比較であるが，資料として利用できるのは「草木図説」の図と記述のみである。ミセバヤに似た淡紅色の花をつけ，茎は上方で分岐，葉は幅

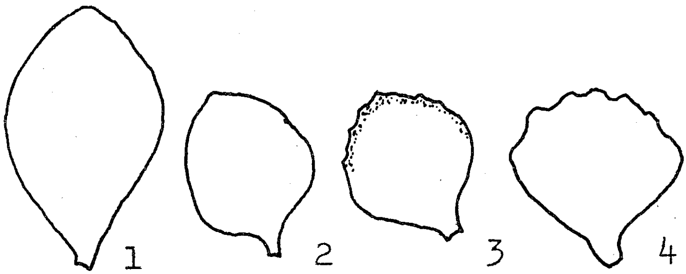


Fig. 2. Cauline leaves. 1. *Sedum kagamontanum* redrawn from "Somoku-zusetu". 2 and 3. *S. ettyuense*. 4. *S. sieboldi*. 2-4. nat. size.

よりも長さがまさるという大まかな形態や，北陸に産するという産地の類似性に照らせば，エッチュウミセバヤと同一種である可能性もあるが，葉序，葉形，分枝の仕方は両者に明らかな差異が認められる。すなわち，カガノベンケイソウは葉が密付し，下部で 3 輪生，上部で互生すると述べられているが，エッチュウミセバヤは常に間を置いて，対生または 3 輪生し，互生している茎は全くみいだされない。「草木図説」に葉が密付せず，白粉を帯びるものをセイコウランと呼ぶとあり，これの方がより近縁なのかもしれないが図示されていなくて不明である。またカガノベンケイソウの葉は長さと幅の比が 2 対 1 と細長く，このような葉はエッチュウミセバヤ集団にはみいだされない。「草木図説」では花序の側出のみならず茎まで分枝しているが，エッチュウミセバヤの観察では生長点が損傷されない限り，このような茎の分枝はおこらない。以上のような相違点から両者を全く同一種とみなすのも難点があるため，ここではエッチュウミセバヤを新種として記載する。今後，石川県近辺でカガノベンケイソウそのものが発見される可能性があり，その時，両者の分類上の位置づけが明らかにされると考える。

終りに，本種の自生地を教えて下さった岡本律恵氏，種々の御教示をいただいた小石川植物園榎本克彦先生，金沢大学里見信生先生，小豆島八代田植物馴化園八代田貫一郎先生に深く感謝いたします。

Sedum ettyuense Tomida, sp. nov.

Rhizoma incrassatum. Caules caespitosi 10–20 (–45) cm longi 2–4 mm crassi, ascendentes vel declinati rubro-virides. Folia opposita interdum ternata, petiolata, patentia, carnosa glauca, ovata vel rhombea margine integra vel crenata interdum rubra, 20–42 (–60) mm longa 17–35 (–47) mm lata, nervis inconspicuis. Inflorescentiae terminales et axillares, in quoque caule vulgo 1–5 raro 10 dispositae, 2–4 cm diam., dense multiflorae. Flores rosei 7–8 mm in diam., pedicellis 3–4 mm longis. Calyx 5 partitus, lobis trianglari-lanceolatis acutis ca. 1 mm longis. Petala 5 oblongo-lanceolata acuta 4–5 mm longa, infra medium usque horizontaliter patentia. Stamina 5 inter petala 4–5 mm longa et 5 intra petala 3–4 mm longa; antherae purpureo-rubrae. Carpella 5 erecta 3–3.5 mm longa rosea, acuminata, medium exter turgida 1 mm crassa, basi brevissime petiolata. Follicula erecta 3–3.5 mm longa.

Nom. Jap. Ettyu-misebaya (nom. nov.).

Hab. Honsyu Prov. Ettyu: on rock along a branch-stream of Zinzugawa, alt. 310 m (M. Tomida, Oct. 15, 1967, fl.); cult. in Toyama (K. Enomoto, M. Tomida et R. Okamoto, Oct. 14, 1972, fl. –type in TI).

Explanation of Plate III.

Sedum ettyuense. Upper: A cultivated plant in Toyama. Lower: Comparison of wild (lower) and cultivated (upper) plants.

○台湾・琉球の植物補遺 (11) (山崎　敬) Takasi YAMAZAKI: Supplement of the flora of Ryukyu and Formosa (11)

20) **Rhamnus chingshuiensis** 台湾の花蓮港県清水山から報告されている *Rhamnus chingshuiensis* は *R. oiwakensis* や *R. lutchuensis* と比較して区別されているが，これらより *R. utilis* シーボルトノキに近いものと考えられる。葉の鋸歯の形や裏面の毛のはえかたは全く同じである。雄花しかないので，雌花を調べる必要があるが，今の所区別がなく，同一種類と思われる。葉が小さい点で変種として区別しておくが，その変異については調べる必要がある。石灰岩地帯に隔離されて生残っているものと思われる。

Rhamnus utilis Decne. var. **chingshuiensis** (T. Shimizu) Yamazaki comb. nov.

Rhamnus chingshuiensis T. Shimizu in Journ. Fac. Text. Sci. et Technol. Shinshu Univ. ser. A. Biol. 12: 46 (1963).

Hab. Formosa: Pref. Hualien, Mt. Chingshui, 1800–2400 m., limestone rocky slopes (T. Shimizu, May 1. 1961, no. 12490, Isotype in TI).

21) **Sinopanax formosana** 台湾特産の種類で，早田文蔵氏は熱帯アメリカにある *Oreopanax* のものとして報告された。李恵林氏は *Oreopanax* とは異ることから，一属一種の新属 *Sinopanax* を作った。然し台湾のものはヒマラヤ，インドシナ，中国西部に広く分布する *Brassaiopsis* に近い。後者は花梗の先に数個の小包があり，そこから細い多くの小花梗をだして散形に花をつける。*Sinopanax* はこの小花梗が殆んど発達しないで，頭状花序的な外観をもち著しく異って見えるが，構造は全く同じである。類似のことはフカノキ属 *Schefflera* の sect. Cephaloschefflera と sect. Schefflera との間にも見られ，同一属内の変化と考えられる。

Brassaiopsis sect. **Sinopanax** (Li) comb. et stat. nov.

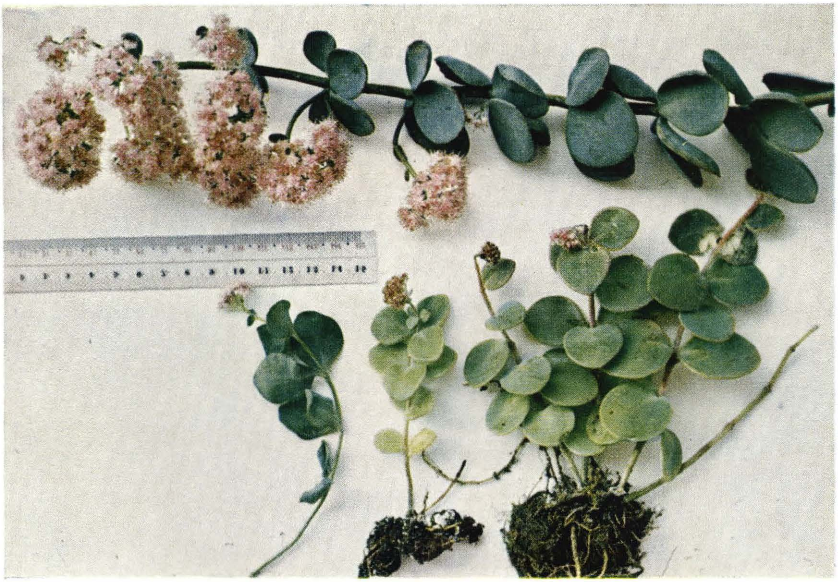
Sinopanax Li in Journ. Arn. Arb. 30: 231 (1949)

Brassaiopsis formosana (Hayata) Yamazaki comb. nov.

Oreopanax formosana Hayata, Fl. Mont. Formosa, 108, f. 14 (1908)

Sinopanax formosana (Hayata) Li. l. c. 231 (1949), Woody Fl. Taiwan, 673, f. 280 (1964)

Distr. Formosa.





M. TOMIDA: A new species *Sedum* from Toyama